

第8回 豊川水系流域委員会

議事要旨

日時：令和5年7月10日（月） 9：30 - 11：30

場所：豊橋商工会議所 4階 406会議室

1. 開会

2. 挨拶

3. 話題提供

(1) 最近の河川事業を取り巻く話題

- ①令和5年6月出水の概要
- ②豊川治水協定に基づく事前放流の実施状況
- ③豊川水系流域治水プロジェクトの取り組み状況
- ④豊川圏域大規模氾濫減災総合サミットの取り組み状況
- ⑤設楽ダムの転流式の実施

・氾濫危険水位や氾濫注意水位等の用語は、一般の人に理解が難しく見直しを検討できないか。また、氾濫警戒などの洪水予報と水位の関係もわかりにくい。

→（事務局回答）数年前より避難に関する情報はレベル化を進め、水位や洪水予報との関係を整理しているが、わかりづらいというご意見をいただいたことについて、担当部局に共有する。

・出水概要第3報について、霞堤地区の浸水時間開始及び浸水解消の時刻を把握しているのであれば、正確に伝えることで、一般の方の理解も得られると考える。

→（事務局回答）霞堤地区の水位計は開口部付近に設置しており、地区内の水路等の溢水は把握できないが、本川から流入したと考えられる時刻から浸水時間を精査・整理したい。

・設楽ダムの建設による水位低下効果を石田地点で算定しているが、今回のように下流で多くの雨が降った場合、下流でも設楽ダムの効果があるか、どの程度の効果となるか。

→（事務局回答）今回の大きな洪水を受けた検証は引き続き進めたい。

・霞堤地区の簡易水位計に関して、浸水開始水位を超過した場合に通行止めを実施すると記載をされているが、それより以前に準備を行っているのか。

→（事務局回答）愛知県の県道通行止めマニュアルでは、浸水警戒水位超過の段階では巡視や通行止めの準備を開始し、浸水開始水位の超過に対して遅れが発生しないようにされている。

・令和5年6月出水で国道1号が冠水したが、豊川放水路からの氾濫ではなく、内水氾濫が発生したという認識で良いか。

→（事務局回答）そのとおりである。

→（設問委員）救急病院が存在するため、早期の排水ポンプ車設置等の対策により浸水の長期化を防ぐ対策が必要と考える。

→（事務局回答）愛知県が検証する予定のため、連携していきたい。

・令和5年6月出水と他の洪水のハイドログラフ（洪水の時間変化を示したグラフ）の比較はされているか。

→（事務局回答）今回の洪水は石田地点で水位ピークが2山であることに対し、戦後最大洪水の昭和44年洪水は1山である。上下流で雨の降り方が異なっていたかなど検証したい。

→（設問委員）下流域に線状降水帯がかかる特徴的な状況が発生したので、精査を進めてもらいたい。

・令和5年6月出水では中流部の水位観測所で平成23年洪水の水位を大幅に上回っている。今後設置予定の霞小堤は、平成23年洪水を流下させる高さとなっているが、今回出水による浸水を受け、これらに対する地元の意見は出てきているか。

→（事務局回答）現状は、河道整備や設楽ダムも未完成であることも踏まえて、整備内容を検証したい。豊川霞堤地区浸水被害軽減対策協議会で地元意見を聞く機会がある。

→（設問委員）本川の負荷を増やすことは困難であると考えるので、協議会等で取り組んでいるソフト対策に力を入れる必要があり、PRを進めてもらいたい。

・水害リスクマップは、高頻度規模においては直轄河川の氾濫より支川や中小河川や内水氾濫による被害が支配的な可能性がある。流域治水プロジェクトに挙げられている土地利用や立地誘導、防災まちづくりに活用するためには内水氾濫を含めた水害リスクマップが必要。

→（事務局回答）内外水一体モデルの検討は全国で行われており、先行事例を参考に検討したい。河川ごとに特性が異なるため、県河川、用水・下水、準用河川も含めて様々な管理者が存在するため、より良いものを作成できるように取組みを進めたい。

・多段階の浸水想定図について、浸水深の凡例の幅が広く、凡例の真ん中くらいの0.5

～3.0m 等の浸水深においても床上浸水や 2 階以上の浸水となり、非常に危険な状況であることが伝わりにくいと考える。浸水深の凡例の横に例えば 3.0m のランクであれば 2 階以上の浸水である等の情報を一緒に表示するとわかりやすいのではないか。
→（事務局回答）浸水想定図の凡例は全国统一のものであるが、表現や表記の方法への意見があったことを担当部局に共有する。

4. 議題

（1）豊川総合水系環境整備事業の再評価

・干潟再生箇所の造成だけでなく、自然の営力を活用して再生することも目指している
と聞いたが、具体的にはどこに土砂を投入しているのか。また、対象箇所は河口部付近であるため、三河港湾事務所と連携しているのか。

→（事務局回答）本川の右岸側で放水路と本川の合流付近の陸域から、干潟造成予定箇所の上流から土砂を投入している。土砂投入の手法や土砂量、出水の影響等を確認し、土砂が定着する方法を学識者の方々にも意見を伺いながら進めている。

三河港湾事務所とは、調査の時期や内容について連携しながら調査し、海域も含めた状況把握に努めている。

→（設問委員）見えるところだけではなく、水面下で堆積する土砂も評価する等、広い視野で考えることも必要。

・ヨシ原再生について、整備面積は増加しているがテリトリー数が令和 2 年から下がっている要因は何か。

→（事務局回答）詳細な分析には至っていないが、出水などインパクトの多さに起因していると考えているため今後分析したい。

・ヨシ原再生はテリトリー数で個体数の増減を把握可能であるが、干潟再生は底生動物種数で整理されている。今後は干潟再生も個体数を整理することで干潟の質を評価しやすくなるのではないか。

→（事務局回答）干潟再生のモニタリング調査で底生動物の個体数は把握しているが、海側からの影響も大きく個体数に振れ幅がある。効果の提示方法については検討したい。

→（設問委員）個体数の変動は自然現象であるため、出水があれば一気に減少する。そういう状況も加味して、個体数の傾向を評価できると良い。

・施工干潟の底生動物の確認種数は安定傾向であるが、自然干潟は安定していないことについて、何か違いがあるのか。

→（事務局回答）今回、自然干潟で設定している調査場所は河口域であり、施工干潟の調査場所である止水域と比較して流量に左右されやすい場所であることから施工干

潟の方が安定していると考える。

- ・中世の旅行記を見ると、干潟の特徴的な風景としてカニが頻繁に登場する。干潟の特徴としてカニにも注目すると良い。干潟にはカニは生息しているのか。

→（事務局回答）カニの生息を確認している。

- ・ヨシ原と干潟の事業は毎年一定面積を整備しているのか。

→（事務局回答）予算や工事の発生土量などの条件があり、毎年一定ではないが随時整備している。面積は事業実施の実数を計上している。

- ・干潟の面積は計測するタイミングによって潮の干満により変動するため、面積や生物の生息種数の増加に加え、干潟の利用者の増加など質での評価が考えられる。

→（事務局回答）意見を踏まえて、事業効果の示し方は引き続き検討したい。

- ・干潟の干潮時の面積と満潮時の面積は把握されているのか。

→（事務局回答）大潮の際の具体的な面積は把握していないが、満潮時には水没する。

- ・CVMの支払意思額と受益範囲を決めるときのアンケート調査は同一のものか。

→（事務局回答）同一のものである。

- ・事業評価では干潟とヨシ原の2つの異なる難易度の事業を1つのアンケートで調査している理由を聞きたい。

→（事務局回答）事業の目標は多様な生物が生息していた昭和40年代の豊川の自然環境であり、ヨシ原や干潟も含めて様々な生物を減らさず維持していくことを目標として一体的に進めているためである。

（委員長の総括）

- ・豊川総合水系環境整備事業の再評価の対応方針（原案）について了承する。

（2）その他

- ・（事務局）第9回の流域委員会では、河川の維持管理についての進捗の報告を予定している。

以上